

忘れ語り、いま語り

山師の子どもはやがて、山に還る

奥会津ミュージアムという不思議な幻の博物館が誕生して、その館長となりました。このミュージアムの行方は知れず、わたし自身の仕事や役割も定かではありません。きっと、いつになっても事情は変わらず、みなさんを困惑させ続けることでしょう。どうぞ、あらかじめ、それをお許してください。

この未来が見通せぬ混沌とした時代には、カンテラも羅針盤もなく、手探りに進んでゆくしかありません。だれが、すぐそこに姿を現わしつつある千人の村について、輪郭鮮やかに語るなどできますか。ただ、それでも、しなやかに、したたかに、なおかつ真っすぐに問い続けることをやめない覚悟を固めること、それだけがわたしたちにできることかもしれません。震災後に、わたしが学んだことのひとつは、諦めたら、そこですべてが終わる、ということです。

さて、わたしは言葉を紡ぎ、文章を編むことを生業（なりわい）としてきた者です。ですから、この奥会津ミュージアムという広場のなかでも、言葉をもって参加することにします。以前に書き散らしてきたエッセイや、新聞に掲載してきた文章、さらに、いま折りに触れて書き継いでゆく随想などを、とりとめもなく織り交ぜて、「忘れ語り、いま語り」と題してつれづれに連載してゆくことにしました。

はじめに、五年ほど前に『なごみ』という雑誌に寄稿した「山師の子どもはやがて、山に還る」という文章です。最後になって、会津の山で炭焼きを始める、などと妄想のかけらが書きつけられています。

さて、語りの庭のはじまりです。

☆

幼い日のかすかな記憶である。年に一度か、二度であったか、父の故郷である福島から、大型トラックが炭俵を運んできた。父は東京の郊外の町で、ほったて小屋のような燃料を商う店をやっていた。その日の父は、あきらかに興奮状態にあった。なぜとも知らず、「お祭りだ」と思った。父は福島のいなかでは、炭焼きをしたり、山を買って山子に炭を焼かせていたらしい。いわゆる山師であったかと思う。わたしは父がカマドを返して、東京に出てきてからの子どもであり、六人兄弟の末っ子であった。福島の父については多くを知らない。しかし、いつしかわたしのなかには、俺は山師の子どもだという出自の意識が生まれて、それがいたく気に入っている。

一九九二年の春、山形に新設された大学に勤めることになった。それからの二十年足らずの日々、野辺歩きと称して、東北の村から町へとひたすら聞き書きのために歩きまわった。山深い村を訪ねることが多かった。しばしば炭焼きの思い出に耳を傾けることになった。父からは、炭焼き、あるいは山師としての人生について聞いたことがない。だから、東北のどこかの村で炭焼きの話に出会うと、そこに父の人生を重ねあわせにした。父の人生を探していたのだと思う。

たとえば、岩手県北部の山形村では、山師としてたくさんの山子に炭を焼かせた経験のある人に聞き書きをしたことがある。八十代のなかば、寡黙を絵に描いたような山師の男の語りは、驚くほどに知性を感じさせるものだった。炭焼きしか仕事になかった。周旋人が来て、蟹工船に乗った若者もいたが、みな肺をやられた。この人は家族をともない、鍾乳洞のある村で、十年あまり数十人の山子をたばねて炭焼きにしたがった。そのあいだに、二度ばかり兵役に引っ張られている。戦後は、マンガン鉱で働いたこともある。炭焼きは昭和三十年代にすたれた。それからは、東京近辺に冬の出稼ぎに出て、なんとか暮らしてきた、という。

山形県内の村歩きをしていた九〇年代なかば、炭を焼いた経験のある人はいくらでもいた。庄内平野の山側の町で、大正元年の生まれの炭焼きで暮らしてきた人に出会った。その人ほど炭を焼いた人はいない、とだれもがいう。訪ねてみると、庭の隅の隠居家のようなところに、老夫婦だけで暮らしていた。炭焼きのことが聞きたくて来たと言えど、脳梗塞で倒れて半年ほどで、とても話せる状態じゃないよ、そう、年若い妻が人のよさそうな笑顔でいう。なかに、その人がいた。眼が合った。唇が動いている。どうやら、せっかくだから、なかに入れ、といっているらしい。そうして、わたしは足の踏み場がない部屋のなかに招き入れられたのだった。

記憶に深く刻まれる聞き書きになった。わたしたちは自然と、顔を突き合わせるように身を寄せて、たがいの言葉に聞き入った。その人の言葉はろれつが回らず、聞き取りにくい。それを妻が翻訳してくれる。そのうち、なんとなく聞き取れる気がしてくる。わたしはいつものように、その人の人生を知りたかった。若いころから、夏場は屋根葺き、秋から冬にかけては山からソリに丸太を積んで降ろす、木出しの仕事をやった。おもしろかった。炭焼きも何十年と、冬場の仕事として続けた。

山の払い下げを受けて、木を伐り、三尺の原木にして、大きな五六の窯で焼いたものだ。一晩に六、七俵は焼いた。朝早く、三時過ぎには起きだした。長く窯に入れるほど、いい炭ができる。ここではもっぱら白炭であるが、よそから先生を招いて、黒炭の窯を作って焼いたこともある。雪に埋もれた山奥での炭焼きである。車もなにもなかった。焼いた炭は背負って、山から里に降ろさねばならない。ひやみた人には炭焼きはできない、その人は笑いながら、最後に、そういった。ひやみた人とは、まめに働かない人といった意か。

その人を師匠に仰いで、炭焼きを始めた、昭和十九年生まれの人からの聞き書きはうれしいものだった。そのとき、この人は五十代になったばかり、時間にうるさい給料取りに嫌気がさして、脱サラのあげくに炭焼きを専業にして暮らすようになっていた。小屋には、五六の窯がふたつ並んでいる。交互に焼く。一回で七俵ほどか。はじめの頃は、なかが炭化していない烏子（からすご）がよく出たが、いまはほとんど出さなくなった。とはいえ、同じように焼いても、いい炭ができるのはひと月に一、二度とあったところだ。

毎朝、七時過ぎには小屋に行く。あんなに朝起きるのがつらかったのに、うそのようだ。窯が呼んでいる気がして、すぐに眼が覚めてしまう。海からの風、山からの風に乗って、枕元まで釜の匂いが漂ってくる、という。いくら働いても、炭焼きならば疲れることがない。一日中、だれとも話すことなく、小屋で過ごす。この人にはそれが合っていた。窯は口をきかないが、とても繊細で、奥が深い。欲がからんで、一本でも多く木を入れたくなる。欲がなければ、炭焼きなどするな、だが、欲に負けると失敗する。師匠の教えである。炭焼きは無口な博奕だなど、この人は呟くようにいう。

この人はなんだか、哲学者のような言葉をときどき、だれにともなく洩らした。それがうれしかった。山に入り、雑木を眺めながら、その一本一本がどんな炭になるのか、想像を巡らしているときがいいな。木にはみんな個性があり、表情があるんだ。雑木はかならず根元から伐る。すると、その切り株からたくさんの芽が出て、若子（わこ）がよく育つ。ブナの大木からは芽が出ない。人の役には立たない。若いうちに伐って、若い森を育てる。それが俺たちの森と付き合う流儀だな。そんな言葉のいくつかが、いまも鮮やかに記憶に残っている。

あの人が語っていたのは、里山の思想だった。里山はすでに、この列島では縄文時代の中期、いまから五千年前あたりには生まれていたらしい。炭焼きの歴史は、いつ始まったのだろうか。金属の精錬のために高熱が必要になってから、産業としての炭焼きは誕生するが、炭焼きそのものの歴史はそれ以前に始まっていたかもしれない。都市の暮らしはおそらく、炭を必要としたにちがいないからだ。

それにしても、炭は燃料であった。炭焼きが化石燃料以前にはエネルギー産業であったことに気づいたのは、うかつにも東日本大震災のあとのことだ。かつて、この列島に暮らす百姓たちはみな、田畑を耕して農作物を作るだけではなく、たいていは里山を舞台として雑木林を伐採し、炭を焼いていた。エネルギー生産にしたがっていたのである。百姓は「百の姓（かばね）」をもって働く人々だった。そう考えると、いわゆる自然エネルギーが農業と両立するような方向へと展開していくことには、ある種の必然が感じられてならない。二十一世紀にはきっと、自然からエネルギーをいただく百姓たちが再登場してくることだろう。

山師の息子はいま、自然エネルギーに関心をいだき、会津の山で炭焼きを始めようと語らいはじめている。時代の風が吹いている。